

新刊紹介

文房清玩 第一巻

中田勇次郎著

本書は、宋代に生活した林洪の「山家清事」、陳慥の「負暄野錄」、趙希鵠の「洞天清祿集」の三篇を翻譯して收めてある。これらはいずれも宋代に興隆した文房生活に關する隨筆で、筆硯紙墨、法書名畫、はたまた花竹香茶などについての鑑賞法、識別法及びこれら文房に對するさまざまな佳趣をその内容としたものである。この風潮はのちの明清時代へと受けつがれ、それに伴つて各時代に數種の隨筆が存する。譯者は順次それらの翻譯を意企し、總じて「文房清玩」と題して本書をもつて第一巻にあてられた。なお、本紹介が印行されるころ、第二巻の屠隆の「考槃餘事」が書肆にでるものと思う。

さて、本書は三篇それぞれについての解題とテキストの紹介（ことに洞天清祿集においては多くの紙數を費し、文房清

玩の時代的特質とその變遷ならびにその意義が論述されてある）、それから翻譯及び注釋とからなりたつてゐる。ことに翻譯に際して底本を明示し、他本の校合に留意し、また、注釋については施注する事項の多角的な典故の探索にみられるその視野の廣さなどは、單なる趣味によるものではない譯者の學問的態度が溢れていて好ましい。

かくて、あまりかえりみられない文房生活の事實が、中國文化史上に占める役割を認識し、ひいてはわが國をも含めた東洋文化の源泉を親しく味わうことができる。原文からくる翻譯のむつかしさ、その譯語の選擇、注釋の前後などに多少の難點は感ぜられようが、全體を通してさほど問題ではなく、譯者の流麗な筆致によつて、宋代以後の文學を考える場合にかなりの示唆をはらみ、かつ裨益を受ける點で、とかくみわすれがちなこの一面の紹介にまず宋代からはじめられた勞を多とせねばならない。最後に、挿圖にあてられた製墨圖は興味深いものであることを付しておこう。

A5・二玄社・五九〇圓（平野）

魏書釋老志の研究

塚本善隆著

本書の著者、塚本善隆博士はいまさら紹介するまでもなく、わが國における中國佛教史學界の重鎮である。その研究分野は極めて廣く、博士の學問に對する情熱と鋭い洞察力には、いつも敬服するところである。本書は今春京都大學を定年退官するに當つて、出版されたものである。斯學に志してより、魏晉から、唐宋を経て、最近世に至るまで、數々の研究論文を世に問われたが、就中、北魏の佛教史を總合的に解明された「支那佛教史研究―北魏篇―」は實に畫期的な業績であつた。本書はその姉妹篇と稱してよいであらう。内容は次の三篇より成る。

第一、魏書釋老志の研究、解説篇（東方學報京都第三十一號）

第二、譯註魏書釋老志（水野精一・長廣敏雄共著「雲岡」の附録第十六卷）
・Leon Hurvitz 英譯）

第三、附篇

一、北周の廢佛（東方學報京都第十